

第1回（仮称）第2次札幌市立高校教育改革方針の 策定に向けた検討会議 会議録

1 日時

令和7年（2025年）12月26日（金） 10時00分～12時15分

2 会場

STV北2条ビル6階 AB会議室（札幌市中央区北2条西2丁目）

3 出席者

(1) 委員

山中 康裕	北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
杉山 晋平	明治大学文学部 専任准教授
石本 茂史	札幌商工会議所 事務局長
土田 美那	AWL株式会社 CHRO兼上席執行役員
林川 希	札幌市PTA協議会 副会長
名達 諒	市立札幌大通高等学校 卒業生（合同会社RaShiRa代表社員）
谷 郁果	市立札幌開成中等教育学校 卒業生
林 匡宏	株式会社commonsfun 代表取締役
松田 考	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 子ども若者支援担当部長
小泉 泰之	市立札幌旭丘高等学校 副校長
牧野 弘幸	市立札幌新川高等学校 教頭
加世田 一憲	市立札幌平岸高等学校 副校長
細田 亜紀子	市立札幌藻岩高等学校 教頭
勝田 敏正	市立札幌啓北商業高等学校 教頭
幸丸 政貴	市立札幌大通高等学校 校長
畠山 正樹	市立札幌開成中等教育学校 教頭
加瀬 富久	札幌市立円山小学校 校長（札幌市小学校長会 副会長）
伊藤 達也	札幌市立八軒中学校 校長（札幌市中学校長会 調査幹事）

(2) 事務局

佐藤 圭一	札幌市教育委員会 学校教育部長
吉田 憲史	札幌市教育委員会 調整担当部長
久保 和也	札幌市教育委員会学校教育部 高校再編準備担当課長
村山 拓己	札幌市教育委員会学校教育部 学びのプロジェクト担当係長
西野 功泰	札幌市教育委員会学校教育部 高等学校担当係長
坂間 卓朗	札幌市教育委員会学校教育部 高等学校担当係長

4 会議録

【事務局：西野高等学校担当係長】

皆様、おはようございます。本日はお足元の悪い中、お集まりいただきましてありがとうございます。遠くは東京、そして旭川からも駆けつけていただきました。ありがとうございます。ただいまから、第2次札幌市立高校教育改革方針の策定に向けた検討会議の第1回会議を開催いたします。私は本日の司会を務めさせていただきます、札幌市教育委員会 学校教育部 学びのプロジェクト担当課 高校担当係長の西野と申します。よろしくお願いいたします。初めに、札幌市教育委員会 学校教育部長の佐藤からご挨拶申し上げます。

【事務局：佐藤学校教育部長】

皆様、本日はご多忙の中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。札幌市教育委員会 学校教育部長の佐藤と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

ご案内の通り、本市におきましては平成29年度より、市立高校改革を一丸となって進めてまいりました。おかげさまで来年度をもちまして、1つの大きな節目を迎えるという段階に来ております。これまで各学校が創意工夫を凝らし、特色化、魅力化に努めてきた結果、多くの市民の皆様から期待を寄せられる市立高等学校という形に成長してきたかと捉えております。しかしながら、私達を取り巻く社会情勢はこの10年、20年を見ましても、かなり急激に変化をしてきております。生成AIに代表される技術革新、あるいは加速する少子高齢化、また価値観の多様化など、そうした変化の中で正解のない時代と言われるようになってまいりました。こうした時代を生き抜く子ども達にとって教育が果たすべき役割というのは、ますます大きなものになっていくと考えてございます。こうした大きな転換点にある今だからこそ、これからの高校のあり方を、当然これまでの市立高校の伝統を大切にしながらではありますけれども、さらにこの先の10年、もっとも先を見据えて、新たな学びの場を再定義していくということも進めていかなければならないと考えてございます。今回の改革方針策定にあたりまして、委員の皆様にはぜひそれぞれの専門的なお立場から、様々な忌憚のないご意見をいただきたいと考えてございます。学校管理職の皆様にも本日は多数参加いただいておりますが、皆様には学校現場の最前線から見える課題と可能性、そして大学関係の皆様には、高等教育との接続を見据えた学術的な知見、そして地域・企業・団体の皆様には、社会が求める人間像や連携のあり方、そしてPTA・卒業生の皆様には、保護者やOB、OGとしての等身大の視点と期待を会議の中でお話しいただければと思っております。この検討委員会は、単に計画書を作るという場所ではなくて、10年後の本市の若者たちが札幌市立高校で学んで本当によかったと、誇りと自信を持って社会へ羽ばたいていただく、そんな将来の地図、未来の地図を皆様と一緒に描いていく場にしていきたいと思っております。限られた時間ではございますが、実りある活発なご議論を期待申し上げ、私からの挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【事務局：西野高等学校担当係長】

本日は第1回の会議でありますことから、本検討会議設置要領第4条第1項の規定に基づき、委員の互選により委員長、副委員長を決めさせていただくことになります。それまでの間、会議は私の方で進行をさせていただきます。それでは委員長、副委員長の選出に先立ちまして、委員の皆様にご自己紹介をお願いしたいと思います。時間の関係上、大変恐縮でございますが、お名前と所属、役職等についてのみご紹介いただければと思います。それでは山中委員からお願いいたします。

<委員・事務局自己紹介>

【事務局：西野高等学校担当係長】

改めまして、皆様どうぞよろしくお願いいたします。なお、清田高校校長の三関委員、藻岩高校PTA会長の佐藤委員については本日ご都合がつかず欠席されているほか、事務局の田中 学びのプロジェクト担当課長と、森 高等学校担当係長が所用により欠席しておりますので、ご報告させていただきます。

続きまして、本検討会議設置要領第4条第1項の規定に基づき、委員長および副委員長を選出させていただきます。どなたかご意見ございませんでしょうか。

【牧野委員】

事務局に一任してはいかがでしょうか。

【事務局：西野高等学校担当係長】

ただいま、事務局一任とのご意見がありました、異議はございませんでしょうか。

<異議なし>

【事務局：西野高等学校担当係長】

特に異議がないようですので、事務局から案を提示させていただきます。

それでは事務局といたしましては、委員長には山中康裕委員、副委員長には杉山晋平委員が適任かと考えておりますので、お二人の選出についてご提案申し上げますが、いかがでしょうか。

<異議なし>

【事務局：西野高等学校担当係長】

それではご異議がなければ、委員長は山中康裕委員、副委員長は杉山晋平委員にお願いしたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。恐れ入りますが、山中委員長、杉山副委員長は正面の席にお座りください。

<山中委員長・杉山副委員長が委員長・副委員長席に移動>

【事務局：西野高等学校担当係長】

それでは山中委員長と杉山副委員長より一言ずつご挨拶いただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【山中委員長】

藻岩高校に15年前くらい前から関わっており、その他の高校にも関わらせていただいて、今回このような大変重要な、次の次世代を担う場を創造する会議の座長をさせてもらうことになりました。大変ありがたく精一杯努力して務めていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

【杉山副委員長】

改めまして、明治大学の杉山と申します。今回の検討会議は、札幌市立高校の教育を考えていく上で非常に重要な会議であると受け止めています。私は社会教育を専門としていますが、こういった計画を策定していく場には、様々なお立場の方が参加しておられると思います。そうした中でお互いに知見を共有しながら、学び合いながら議論を進めていけたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局：西野高等学校担当係長】

ありがとうございました。これからの議事進行については、山中委員長にお願いいたします。

【山中委員長】

それでは早速議事に入らせていただきます。皆様のお手元の次第にあります議事に基づいて進めていきたいと思っております。まずは「高校教育改革方針の概要と協議の進め方」、および「高校教育を取り巻く現状」の2点について事務局から説明をお願いいたします。

【事務局：村山学びのプロジェクト担当係長】

それでは私の方から、高校教育改革方針の概要と協議の進め方、高校教育を取り巻く現状の2点について一括してご説明させていただきます。お手元に「札幌市立高校教育改革方針の概要と協議の進め方」の資料をご用意ください。

本方針につきましては、市立高校における教育改革の方向性や、その方向性を踏まえた具体的な取り組みを体系的に進めていくことを目指すとともに、人口減少期における高校のあり方を示すことを目的として、平成29年に策定されまして、札幌の市教育委員会所管の市立高校7校と中等教育学校1校が対象となっております。構成としましては、策定後の10年間を見据えた基本理念を示す「札幌市立高校教育改革ビジョン」と、前期・後期で具体的に取り組む施策や事業を示す「実行プラン」で構成されており、現在は第2期実行プランの期間中でありまして、ビジョン、実行プランともに令和8年度が計画の最終年度となります。

続いて2ページ目ですが、本方針の中で掲げているビジョンについては、「目指す生徒像」と「市立高校の将来像」を掲げ、それらを実現するために3つの基本的方向性「生徒の個性や能力を伸ばす質の高い教育の充実」「社会に開かれた教育活動の推進」「学校の取り組みを支える仕組みの構築」を柱として、それに沿った形で教育改革を推進しております。

3ページ目の図が、高校改革のイメージを図式化したものになります。真ん中の三角の図で示す通り、市立高校に限らず高校教育において育成すべきものを基礎としつつ、市立高校共通の取り組みや各学校における特色化の充実を図りながら、市立高校全体で質の高い教育の実現を目指しており、そこに地域や企業等との相互連携や、学校の取り組みを支える仕組みの構築も図ることにより、市立高校の学びをさらに大きなものにすることを目指しております。

各学校の特色につきましては、4ページに記載の通り、改革方針を踏まえながら生徒それぞれが個性や能力を伸ばし、多様な選択ができるよう各校で様々な取り組みを展開しており、昨今の出願倍率の状況や、現在集計中の在校生を対象としたアンケート結果でも、約88%の生徒が高校の教育内容は全体的に満足していると回答するなど、ニーズを捉えながら取り組みを進めてきたものと考えております。なお、このアンケート結果につきましては、集計が済み次第、本検討会議の中で改めてご説明させていただきます。

続いて5ページ目です。次期方針の策定に向けた協議の進め方についてご説明します。協議に際しましては、本検討会議のほか、市立高校教員と教育委員会事務局で組織する「検討ワーキンググループ会議」を設置しまして、本検討会議で出た意見を踏まえてワーキンググループ会議で検討する、ワーキンググループ会議で検討した内容をさらに本検討会議で検討するということを繰り返しながら、議論を深めていただきたいと考えております。教育委員会事務局ではそれらの検討内容を踏まえ、第2次高校教育改革方針（案）を作成し、それをまたそれぞれの会議でご検討いただく予定となっております。

続きまして次期方針の構成案です。次期方針も現方針と同様に、今後10年間の方向を示す「教育改革ビジョン」と、ビジョン実現に向けた具体的な施策を示す「教育改革実行プラン」で構成する予定でございます。対象期間につきましては、ビジョンが令和9年度から令和18年度、実行プランにつきましては第1期が令和9年度から令和13年度、第2期が14年度から令和18年度を想定しております。なお、今回皆様にご協議いただくのは、この「教育改革ビジョン」と「第1期の実行プラン」の部分でありまして、第2期実行プランについては計画期間中の令和12から13年度頃に別途作成する予定でございます。

続きまして7ページから8ページ目のスケジュールについてです。今回、スケジュールについても皆様にご協議いただきたく、A案とB案の2つをお示しさせていただきました。その趣旨としましては、本来であれば本方針の期間が令和8年度までとなっているため、次期方針は令和8年度中に策定を完了し、令和9年の4月を迎えるというA案をとるとというのが一般的でございますが、一方でこの後ご説明しますが、現在国において学習指導要領の改訂に向けた審議や、高校授業料の無償化等も契機とした高校改革に向けた国の動きが活発化してきており、それらの動きを踏まえて皆様にご協議いただくためには、令和9年の冬頃の策定を目指すB案の方をとるという選択肢もあるということで、この2案をご提示させていただきました。詳細については、この後高校教育を取り巻く現状をご説明したあとで、再度ご説明させていただければと思います。

では続きまして、高校教育を取り巻く現状についてご説明いたしますので、「資料2 高校教育を取り巻く現状」をご覧ください。こちらの資料、分量が多くなり大変恐縮ですが、高校制度の概要から始まり、最近の制度改正、高校に関連する国や本市の現状、この先10年、20年を見据えた未来の展望、高校教育に関連する国の動き等について資料としてまとめさせていただいております。今後の高校改革の方向性を検討する際の参考資料の1つとして捉えていただければと思

います。なお、本日はお時間の関係もありまして、1つ1つの資料についてご丁寧に説明するのが難しく、かなり駆け足での説明となってしまいうことをあらかじめご了承ください。もし本日の会議の後でも、お帰りいただいた後でも、何かご不明な点等ございましたらメール等でも結構ですのでお気軽にお問い合わせいただければと思います。

それでは、スライドの1ページ目から4ページ目の高等学校制度の概要からご説明いたします。まず高校につきましては、中学校までの基礎の上に心身の発達に応じた高度な普通教育と専門教育を施すことが目的となっており、全日制、定時制、通信制の3つの課程を置くことができます。学科については普通科、専門学科、総合学科の大きく3区分で構成されております。また卒業には、全学科共通で74単位以上の修得が必要となっており、専門学科の場合についてはそのうち25単位以上を専門学科から履修することが必要となっております。

また通学区域については4ページ目に記載してございますが、北海道については19の区域に分けられ、札幌市は石狩学区に含まれております。石狩学区の普通科においては、原則として居住する学区内の学校を選ぶということになりますが、札幌の市立高校の場合、全日制高校についてはそれより狭く、札幌市内が通学区域となっておりまして、ただ、学区外就学の規定もございまして、札幌市立高校の場合については定員の20%までは市外からの入学をすることが可能です。また、定時制の大通高校については道内全域が通学区域となっております。

続きまして5ページから9ページの高校に関連する主な制度改正についてでございます。高校に関する制度については時代の背景も踏まえながら、様々な改正が行われてきており、最近では令和3年に「新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正」、令和6年には不登校生徒等への通信教育や遠隔授業が制度化されました。令和3年の制度改正では、6ページに記載の通り、各学校に期待される社会的役割、いわゆる「スクールミッション」を再定義することとなり、さらには高校教育を入口から出口まで一貫した体系的なものとするため、各学校が「三つの方針」を策定し公表することとなっております。

また7ページに記載の通り、生徒の資質能力については学校だけで育まれるものではないということから、地域社会や企業等に関わった教育活動を行い、社会とつながる多様な学びを実現するため、様々な関係機関と連携協力体制の整備に努めることが法令に明記されたところです。

続きまして8ページ目です。現在高校生の約7割が普通科に在籍している状況ですが、生徒の興味関心は多様化する中で、従来の文系、理系の枠組みだけでは不十分だという指摘もあり、令和4年度からは学際的・複合的な分野に取り組む学際領域学科や、地域社会が抱える諸課題に対応する地域社会学科などの、新たな普通科の設置が可能となり、普通科そのものの定義が広がっております。なお、今現在石狩学区内においてはまだこの新しい普通科を導入している高校はございません。

続きまして9ページ目の令和6年度の制度改正でございますが、多様な学習ニーズへの対応として、令和6年度より全日制・定時制において不登校の生徒に対して授業に代えて通信教育を行うことが可能となり、これにより学校への登校が困難な生徒でも最大36単位までは遠隔授業等で単位を修得できるようになってございます。

続いて10ページ目以降は国や札幌市の高校に関連するデータになります。まず高校への進学率ですが、全国の高等学校等への進学については通信制も含めると98.8%となっており、義務教育ではないものの、ほとんどの子どもが進学する教育機関となっております。

札幌の現状については11ページの通りになりますが、全国と同様98.4%と高い数字となっておりますが、最近は通信制へ進学する生徒が急増しており、令和元年から令和6年までの5年間でも約2.2倍に増加してございます。令和6年度には全体の8.2%の生徒が通信制を選択するなど、学びの形態が変化してきていることがわかります。

続いて、その通信制高校に在籍する生徒も変容してきております。12ページでは通信制高校に在籍する生徒に占める就業者の割合をグラフにしてございますが、かつてのように働きながら学ぶ生徒というのは減少しまして、代わって小中学校の段階で不登校経験を有する者が全体の65%程度占めております。このように通信制が勤労青年のための教育というものから、多様な背景を持つ生徒の選択肢へと役割が大きく変容してきております。

次にその不登校の状況でございますが、13ページにある通り近年全国的に小中学校段階の不登校が急増してございます。札幌市においても中学校で令和6年度に3,612人、千人あたりに換算す

ると約82.2人が不登校ということで、かなり高い数字でございます。これは札幌市に限らず全国的に社会的な大きな課題となっております。

続きまして学科の設置状況についてです。15ページをご覧ください。全国的な傾向として、普通科に在籍する生徒はここしばらく70%以上で推移しておりまして、反対に専門学科の割合は年々減少しております。札幌市内に置いては全国と比較して普通科に在籍する生徒の割合が多く85%となっており、学科の数自体に着目した16ページ、17ページのデータを見ても、全国の普通科の割合が私立・公立平均して約66%ぐらいなのに対して、札幌は77%ぐらいが普通科が占めているような状態でございます。

続きまして18ページ目でございますが、単位制の学校数・定員数の推移ということで、学年による教育課程の区分を設けず、生徒が自分の学習計画に基づき、自らの興味関心に応じた科目を選択することができる単位制を導入している学校の推移でございますが、年々増加してきておりまして、全国でも全体の約17%の学校が導入しております。札幌市内においては12の学校で単位制を導入してございますが、そのうち市立高校については旭丘高校、清田高校、藻岩高校、大通高校の4校が単位制を導入してございます。市立札幌開成中等教育学校も高等学校ではありませんが単位制でございます。

次に、高校卒業後の進路状況についてです。19ページの通り、全国、札幌ともに高校卒業後6割以上の方が大学、短大に進学している状況です。しかし、20ページの方に示す全日制・定時制・通信制の課程別の数字で見ると、定時制の中では就職者が、通信制の中では進路未決定が多くなっていることが数字として現れてございます。

また、昨今大学の入試の状況も大きく変わってきておりまして、21ページに示す通り、大学入学全体者の半分以上が学力検査だけではない、生徒の資質能力を多面的に評価する「総合型選抜」ですとか「学校推薦型選抜」で入学している状況でございます。高校での探究活動ですとか学習活動実績等が大学進学にもつながるようになっていきます。

続いて22ページ以降が産業界等で示されているこれから求める人材についてでございます。22ページにつきましては経団連が企業向けに行ったアンケート結果を掲載してございますが、これからの人材に求める資質能力については主体性や課題設定解決能力、文系理系の枠を超えた知識・教養が最も多くなっており、23ページに記載する経産省公表の「未来人材ビジョン」では、ゼロからイチを生み出す能力ですとか、一つのことを掘り下げていく姿勢、グローバルな社会課題を解決する意欲、多様性を受容し他者と協働する能力が今後求められるとしております。

一方で、実際の労働市場では将来大きなミスマッチが起こることが懸念されており、24ページに記載の通り、2040年には事務、販売、サービスといった業種では約300万人の余剰が発生するのに対し、AIやロボット等の活用を担う人材については300万人以上の不足が発生すると言われております。また、25ページに書いてある学歴間のミスマッチについては、研究者や技術者等を中心とした理系の大学及び大学院卒の人材が100万人以上不足し、逆に文系大学卒の人材は約30万人の余剰が生じる可能性があるとして示されてございます。

続きまして人口減少による影響でございます。26ページの通り、全国の15歳人口については令和20年に約74万人程度となりまして、令和5年度と比較しても約31%も減少する見込みです。札幌市の推移については27ページに記載の通りですが、令和13年度ぐらいまでについてはほぼ横ばいで推移いたしますが、その後一気に減少に転じまして、現在の0歳児が高校に進学する令和22年には1万人を下回り、令和7年度と比較しても約6千人の減、割合にして39%も減少する可能性があります。これを、仮に高校のクラス編成に当てはめた場合、150学級分に相当しまして、市内で51校ある道立・市立・私立の学校で、もし平均的にクラスを減らすとしたら1学年で約3学級ずつ減らす計算となります。市立高校の場合1学年あたりのクラス数が6クラスから8クラスとなっておりますので、単純に計算すると令和22年にはそれが3から5クラスとなり、学校規模が大幅に縮小する可能性があります。

続きまして28ページ目以降は国の動き等についてまとめたものでございます。まず学習指導要領に関連するものでございますが、昨年から改定に向けた議論が本格化してきております。現在、文部科学大臣から諮問を受けた中央教育審議会において議論を行っているところですが、スケジュール的には来年、令和8年度夏頃までに審議の取りまとめを行い、令和8年度中に答申として取りまとめられるよう検討を進めるとしてございます。なお、諮問のポイントが29ページ30ペー

ジ、今年の9月に論点整理として示された議論にあたっての基本的な考え方を31ページに記載していますが、今回の改定にあたっては、これからの予測困難な社会情勢に加え、不登校をはじめとした多様な背景を持った生徒がいる現状ですとか、教員の負担など、教育現場が直面する課題を正面から見据えたものとなっており、新しい時代にふさわしい学校のあり方を構築するという側面が強い印象があります。その中で、9月に示された論点整理では「自らの人生を切り拓くことができる民主的で持続可能な社会の創り手」を皆で育むために、主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」の3つを踏まえて議論を行い、教育課程内外のあらゆる方策を用い、三位一体で具現化していくとしています。なお、高校における新しい学習指導要領への移行については令和14年度頃からとなる見込みですが、取り組める内容については改定を待たずして実施していく必要がございますので、この国の審議状況については注視しながら、本検討会議の中でも情報を随時共有させていただければと思います。

最後に、32ページ以降の高校教育関連に関する国の動きについてまとめたものでございます。未来を見据えた社会、経済の持続的な発展上には、社会や産業の発展をさせる人材育成をいっそう強化、底上げする必要がある、そのためには高校が極めて重要な役割を担っている点を踏まえ、また現在検討中のいわゆる高校授業料の無償化等の影響も考慮しまして、現在国において高校改革の動きが非常に活発化してきております。具体的には、2040年を見据えた高校改革の指針となる「高校教育改革に関するグランドデザイン」を今年度中に国において策定するとしておりますが、11月にはその骨子が発表されました。その中で示された高校改革の方向性として、1つ目がAIに代替されない能力や個性の伸長、2つ目が経済・社会を支える人材育成、3つ目が多様な学習ニーズに対応した教育機会・アクセスの確保の3つを高校生に挙げて、高校が未来の労働市場や地方経済、イノベーションを起こす力を底上げする起点としての役割を果たしながら、高齢化や人口減少といった課題を社会全体で解決する社会構造へ変化させていくとしております。また、それらを実現するための支援の枠組みについても触れられており、33ページに記載の通り、公立高校は地域の教育の機会均等を図る重要な存在であり、いわゆる高校授業料の無償化への影響も考慮し、公立高校の取組強化に対して財政的な支援を強化するとしてございます。詳細についてはまだ見えてございませんが、我が国が抱える課題も踏まえ、専門高校の機能強化・高度化、普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化、地理的アクセス・多様な学びの場の確保の3つに資する取り組みに対して、支援を行うということが示されており、このグランドデザイン踏まえて都道府県において策定する教育改革実行計画に沿った取り組みについて、令和9年度に創設する交付金により支援が行われる見込みでございます。

また、34ページのとおり、個人に対する支援として、いわゆる高校授業料の無償化や、低所得者層への奨学給付金の拡充について具体を検討中ということで、無償化に関する部分については所得制限の完全撤廃、また私立高校への支給上限額の引き上げが予定されております。これにより、生徒にとっても進路先の選択の幅が今まで以上に広まることとなりますが、35ページに記載してございますが、北海道教育委員会が今年の春に実施した無償化に関するアンケート、中学生とその保護者宛てに行ったアンケートでは、石狩学区の中学生の25.1%が、またその保護者の29.4%が進路希望を公立から私立に変更するというような回答も出ており、今後高校教育に関する環境は大きく変化してくる可能性がございます。

以上で資料2のご説明を終わりますが、このように現在の高校教育では、不確実な未来を生き抜く力を育む場としての役割がいっそう求められており、札幌市としましてもこの機会を改革の機会と捉えて、次世代を担う子どもたちが自らの人生を切り拓いていけるような教育環境を構築する必要があるとございます。ここで資料1のスケジュールのほうに戻っていただければと思います。

まず一般的なA案の方でございますが、令和8年度中に次期方針を確定する場合については、庁内での調整期間等を踏まえ、一旦令和8年の7月頃までにはこの検討会議の中での協議内容を審議のまとめとして整理し、その後事務局のほうで作成する素案をベースに、再度協議をいただきまして、令和8年11月頃までに方針案として固める必要がございます。一方、先ほどご説明したとおり、国における学習指導要領の具体が見えてくるのがおそらく令和8年の8月から9月頃、また国のグランドデザインを踏まえた道の改革実行計画の策定については、令和8年度中ということだけでまだ詳細時期は未定という状況となっており、このスケジュール踏まえ、本検討会議の中でそれらの状況を踏まえた検討や協議を十分に行うのはなかなか難しい状況

と考えております。

そこで、8ページのB案をお示しさせていただきましたが、札幌市としましても国や道の動きを注視しながら、一旦審議のまとめを令和の9年2月頃までに整理しまして、その後事務局作成する素案をベースに令和9年の6月頃までに方針案として整理するスケジュールを示させていただきました。この場合、先ほどのA案と比較しても様々な状況を踏まえながら次期方針を策定することが可能となりますが、一方で方針の確定がこのスケジュールでいくと令和9年の冬頃となってしまうので、その策定までの期間の取組みにつきましては、現方針が定める内容の継続実施ですとか、令和8年の9月頃に整理する中間まとめ、また令和9年2月頃に整理する審議まとめで示す高校改革の大きな基本的な方向性に沿った取組みを実施するというような対応になるかなというふうに思っております。以上のことを踏まえまして、どちらのスケジュールで検討を進めるかについても、委員の皆様のご意見をいただければと思います。私からの説明は以上でございます。

【山中委員長】

ありがとうございます。ただいまの高校教育改革方針の概要と協議の進め方、高校教育を取り巻く現状の2点について説明がありましたが、ご意見やご質問がありましたらよろしくお願いたします。いかがでしょうか。

今の高校はものすごく劇的に変わりつつあり、先ほどの国の方針も、少し前から「生きる力」ということで、変わりつつあったんですが、さらに加速して変わろうとしてますので、そういう意味ではこの中身を現場の先生だけでなく、ここにいる委員の方々も、この検討会議だけでは把握できないと思うので、なるべく丁寧な進め方というか、例えば委員の方にも現場を見に行ってみるとか、あるいは今二層構造でワーキングとこの検討会議という風になってますけど、その間で交流会をやってみるなど、ちょっとした工夫が必要です。総じて、案としてはB案の方がいいかなと思ったりもしますが、他の方はどう思われますでしょうか。ご意見をお願いしたいと思います。

【林委員】

林です。予算要求という生々しいお話になりますけれども、予算要求が何かまとまったものでいけるのか、それともふわっとした中間取りまとめでいけるのかっていうのが、この差の1つだと思います。予算については、生々しい話に見えて大事で、何かをやっていくにも予算ってやっぱり必要ですし、私たちも今、学校と地域をつなぐコーディネーターということを委嘱受けて、色々動かさせていただいてますが、生徒たちが「こんなことやりたい、あんなことやりたい」って言ったらやっぱり予算が必要ですし、コーディネーションする人件費も必要ですし、講演とかいろんなところでアクションを、そうするとまた予算が必要です、というときにやっぱりお金のことなしに学びの充実って語れない部分もあるのかなと思うと。そのあたりですね、この2つの差を考えると。何かその論点もあってもいいのかなと思いました。

【山中委員長】

ありがとうございます。とてもいい指摘だと思います。まだよくわからないかもしれませんが、事務局として今の予算のところで早めに決めたほうがいいのか、それともゆっくりやったほうがいいのか、そのあたりはどう思われますか。

【事務局：村山学びのプロジェクト担当係長】

B案の方の場合、一旦中間取りまとめで令和9年度に向けた予算要求をするといった形になってますが、札幌市全体の計画で見たときに、真ん中の「市政運営」の部分に、第2次札幌市まちづくり戦略ビジョン・アクションプランというものがございます。この計画が令和9年度までとなっていますが、今の高校改革に関する予算等についてもこのアクションプランの対象となっておりますので、一旦9年度までについては現方針を踏まえた内容となっています。そういった点では、もしB案をとったとしても令和9年度に向けた予算編成がしにくいということはあまりないかなと考えております。

【土田委員】

現場としては、どのくらい困るんですかね、例えばA案とした場合に、変えましょうってなったけれど、さらにそれを変えましょうってなって混乱を招くのか、現場のやりやすさと子ども達がどれだけ混乱しないかというところが大事な観点なんじゃないかと思うんですけど。実情としてこれがどれだけ皆さんのオペレーションの側に影響しますか。

【山中委員長】

すでに今のプランの方向性として札幌市はかなり最先端の素晴らしい内容となっているので、今回プランがガラッと変わるものではなくて、さらにそれを加速するような形なので、加速のタイミングを国や最新の考え方を組み込んでから加速したほうがいいのか、それとももう元々8年まででやることになってたから早くそれに粛々とやるか、それぐらいの違いのように私は感じております。

【杉山副委員長】

私もB案のほうがよいのではないかと思います。1点目として、「国の動向を見据えて」という点で考えると、A案の場合は学習指導要領の審議のまとめが出る前にこちらの検討会議の審議のまとめが出ることになります。これは、札幌の市立高校改革が全国の高校教育改革をリードしていくんだという姿勢を示す意味では、先手を打つという1つの選択肢だとは思いますが、しかし、あまり焦らずに、学習指導要領をめぐる議論を見据えながら、うまく並行して検討会議を進めていくタイミングを図ることを考えるとB案のほうが適していると感じています。もう一点、この案の中で「中間まとめ」が設定されていることの意味は、この検討会議を進めていく上でプラスに捉えていける点だと思います。「中間まとめ」の前と後で、どのように協議のギアを上げていくのか、そのあたりのイメージなんかも持ちながら進めていくことができると思います。せっかく全体のスケジュールを延ばすのであれば、その期間で何ができるのかという点についても、論点として位置づけてもいいのかなと思いました。

【牧野委員】

新川高校教頭の牧野と申します。学校側としてもB案のほうが間違いなくいいかなと思います。やはり丁寧に議論しながらより良いものにしていくということであれば、B案のほうがいいと思いますし、その内容を深めるという部分でも、間違いなくB案のほうがいいであろうと考えています。一つ気になるとすれば、令和9年度の方針確定が11月から12月ということですが、今現状としてもかなり各校とも高校改革が進んでいますし、少し前のものとは違って生徒たちが主役で主体性が身につくようなプログラムを行ってる学校が非常に多いと思います。ですから一旦このB案の形で、もし差し支えがないのであれば進めていき、そして皆様の議論を深めながらしっかりとしたものを作っていく方がいいかなと思います。

また、国の論点整理も拝見しましたが、相当な分量があって、これまでのものと変わるところもたくさんあると思います。そういったことも含めて、A案だと時間的にかなり無理があるかなという印象ですので、B案の方が、私としてはいいというふうに思っております。以上です。

【幸丸委員】

私も校長会の立場としても今代表して出てきていますが、今、様々な方がおっしゃられてましたけれども、今学習指導要領の改訂の際にも審議の状況が各学校にオンラインタイム等で公開されていて、その先取りの情報の中で今後どう変わっていくのかっていうのは各学校が捉えながら、学校改革を行ってるところです。皆様から出た意見と同じですけども、B案の方でじっくりと考えながら進め、協議の段階で行われている内容を学校の方にフィードバックしていただきながら、協議がどのような方向性で進んでいるかということが見える化されていけば、方針が策定された瞬間から何かが変わるということではありません。準備期間を並行して学校現場も行っていくという観点からいけば、先ほど事務局の方から予算要求に関するデメリットもないというこ

とであればですね、間違いなくB案のほうがいいかなというふうに考えております。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございました。他はいかがでしょうか。なんとなくもう皆様B案で、頷いている様子も見えていたので、異議なしという感じがいたしますが。よろしいでしょうか。

<異議なし>

【山中委員長】

それでは国の動向、道の動向を踏まえながら検討を進めていくB案を基本として、今後検討を進めていきたいと思っております。

では続きまして、市立高校のこれまでの取組みについて事務局から説明をお願いいたします。

【事務局：西野高等学校担当係長】

それでは私の方から、市立高校のこれまでの取組みについてご説明をさせていただきます。お手元に「03 市立高校のこれまでの取組」という資料をご用意ください。一括してこれまでの経過を説明させていただきます。

今回の改革方針を検討するにあたりまして、まずは現行の高校改革以前の改革内容についても振り返ってまいりたいと思っております。平成15年、2003年になりますが、当時の課題としまして高校への進学率が97%に達し、高校は生徒によって選ばれる時代に突入し、多様な特色ある学校づくりが求められ、さらに道立、私立、市立高校がある中で、札幌市立高校の存在意義を明確に示すことが必要となりました。

そのような各校の特色を尖らせるということで、旭丘高校に普通科単位制、開成高校に国際学科、藻岩、清田、新川、平岸に、普通科専門コース・一般コースの導入。啓北商業高校は学科改編、そして、市立高校4校にまたがって設置されておりました定時制高校については、新しいタイプの定時制として統合するということが当時、議論されておりました。推進計画として具体的には、旭丘高校に2004年、全国に先駆けて単位制が導入され、2005年には清田高校にグローバルコース、平岸高校にデザインアートコースが設置されました。啓北商業高校は未来商学科への学科改編、そして、制度の導入ということではございませんが、藻岩高校、新川高校にはそれぞれ環境教育、フロンティア制の導入といった教育実践がこの頃から行われております。大通高校につきましては、先ほどの4つの定時制高校を統合し、2008年に単位制、3部制の定時制高校として開校しております。2015年からは市立初の公立中高一貫教育ということで、開成中等教育学校が開校しております。

さらに、市立高校全校共通の取組みとして、学校教育体制の充実、進路探究学習の充実、国際理解教育の充実が図られております。

2017年平成29年からは、現行の市立高校改革を10年計画でスタート。5年毎に第1期第2期に分かれております。目指す生徒像、市立高校の将来像、基本的方向性についてはご覧の通りでございます。併せて皆様のお手元に、改革方針と概要版の資料をお配りしました。特に、概要版プリント裏面にある札幌市立高校教育実行プラン第2次案体系図の一覧表をご覧いただきたいのですが、基本的な方向性として、「生徒の個性や能力を伸ばす質の高い教育の充実」「社会に開かれた教育活動の推進」「学校の取組みを支える仕組みの構築」と、大きく3つの基本的な方向性を示しております。こちらの内容については、現在進行形で取り組んでいるところでございます。この会議で対話を進めるにあたって、これらの資料もご活用いただければと思っておりますので、よろしく申し上げます。

現行の学習指導要領については令和4年度から高校でも本格実施しております。新しい学びとして、これまでのコンテンツ、知識・技能だけではなくて、コンピテンシー、資質・能力を育むことが重視されております。

次ページからは、各学校の現状を掲載しておりますが、令和3年に札幌市立高校につきましては

スクールミッションをすべての学校に定めております。

旭丘高校については現在、数理データサイエンス科を令和4年に設置しておりまして、サイエンスの分野についても力を入れているところでございます。

藻岩高校については、市立高校の中で探究的な学習の先進校として多くの生徒が様々なフィールドで学びを深めているところでございます。

新川高校については、小・中・高が隣接しておりまして、その立地条件を活かして、総合的な探究の時間等で小・中学校との連携を深めているところでございます。

清田高校については、英語教育をはじめ、様々な国際交流を実施しております。また、本年度より清田高校の教育実践を支える仕組みとして、清田応援団というものが結成されております。

平岸高校については、デザインアートコースを持っておりますので、様々なフィールドでデザインを通じた教育活動を推進しております。本年度からは清田高校同様、地域と連携したスミヒラベースという教育実践を支える仕組みが構築されてましたので、総合的な探究の時間の充実等に向けた動きが活発化しております。

啓北商業高校については、新たな商業教育を見据えて、起業家教育プログラム、プログラミング教育の実践に取り組んでおります。

大通高校については、不登校や困り感を抱える生徒たちを迎え入れておりますので、安心安全な居場所、そして様々なことに挑戦できる居場所として教育実践を育んでおります。

市立札幌開成中等教育学校につきましては、総合的な探究の時間だけではなく、6年間の連続した学びを活かしながら、国際バカロレア教育のプログラムを導入し、学校全体で課題探究的な学習に取り組んでいるところでございます。

これまで紹介した各学校の特色を活かしつつ、お互いの教育資源を共有し、市立高校ならではの実践をさらに推進しているところでございます。時間の関係上、代表的な取り組みのみご紹介させていただきますが、1つ目は進路探究セミナーです。こちらは、市立高校に入学してきた生徒約2,000人を北ガスアリーナに集め、将来の生き方や進路について考えることを目的としたセミナーを開催しております。

次に、学校間連携指定事業として、市立高校生が相互に交流し、その成果を単位認定できる仕組みとして、現在は起業家教育プログラムやまちづくりに関わる教育、食農体験の教育等があり、35単位時間活動すると、それぞれの学校で単位認定も行っております。

3つ目に、市立高校プレゼンテーション大会でございます。年明け3月8日に今年度も開催を予定しておりますが、それぞれの学校での学び、そして先ほどの学校間連携を通じた学びを発表し、共有し、学び合うことを目的として開催しております。さらに中学生や広く市民に市立高校の魅力を発信することも目的としております。

次に、令和6年度から学校と地域をつなげるコーディネーターを配置いたしました。現在はコーディネーター3団体、コンシェルジュという役割を担った団体も1団体配置しております。これにより、社会に開かれた教育課程や地域創生の核となる市立高校の実現に向けた取り組みを推進しております。

こちらは、現在の市立高校全体を表した図になっておりますが、現在は各学校が様々な団体と学校単位でつながって教育実践を行っており、その間に、先ほどご紹介した市立高校のコーディネーター、コンシェルジュにもご協力をいただいて、特色ある教育を推進しているところでございます。

最後に、現在、藻岩高校と啓北商業高校を発展的に再編し、令和9年に開校を予定しているところでございます。2校の選定理由としましては、両校ともに南区に設置しているということ、施設の老朽化が進んでおり、改築や改修が必要であることが要因となっております。藻岩高校につきましては探究学習が進んでいるということと、啓北商業高校については、商業の専門教育を実施しておりますので、この2つを掛け合わせて、普通科5クラス、商業科3クラスの魅力的な学校にするため、現在藻岩高校内に再編準備担当課を設置し、準備を進めているところでございます。市立高校のこれまでの取り組みについてのご説明は以上でございます。

【山中委員長】

ありがとうございました。ただいま事務局から説明がありましたが、ご意見、ご質問ありましたらお願いします。

【土田委員】

プレゼンテーションありがとうございました。すごいですよね。私は2018年に大阪から引っ越してきたんですけど、娘の言語の問題、英語しか喋れないとか色々あったので、この2017年の改革と、市立高校のオプションを見て引っ越してきました。なぜか市立高校ではなく、私立に行っちゃったっていうのがあるんですけども、札幌では非常にリラックスして子育てができると思います。必要以上に受験勉強をする必要もないっていうのが魅力で、こんなにバラエティーのあるオプションがあるので、もっとPRできたらいいんじゃないのかなと思います。私はこれを理由に札幌に引っ越してきましたけれども、そういう人を呼び込めると思うんですよ。これだけのことがあって、これだけ自然と都会とテクノロジーで色んなことで遠隔から働ける今の時代であれば。なので、もうすでに素晴らしいところが一杯あって、そこを発信できたらいいんじゃないのかなと思います。

【山中委員長】

ありがとうございます。ただいま委員から出たようにもうすでに意見交換に入ったような感じですが、他に今のプレゼンテーションに関わる質問などありますでしょうか。

よろしければ、ここで議題としては1回終わりにして、現在の高校の現状や取り巻く状況、これからの10年、さらにはその先を見据えて、今後の高校教育に期待することや、市立高校が目指すべき姿など、皆様から忌憚のないご意見を順番に言ってもらうという形で、意見交換を進めたいと思います。いかがでしょうか。

<異議なし>

【山中委員長】

では、順番は名簿順にしたいのですが、副委員長と委員長は最後ということで、石本委員からお願いいたします。時間が限られておりますので、2、3分ということで、よろしくお願いします。

【石本委員】

経済団体という立場から見て、この会議で改革案を作っていくという中で、一つテーマというか、市立高校を卒業する子どもたち、その人たち一人一人の幸せを目指す改革案にするのか、それとも市立高校ですから、札幌の全体を幸せにするための教育を重視するかで、結構話が変わってきているのかなという風に感じております。

10年ほど前から教育委員会さんの別の会議に出させていただいて、今市立高校のそれぞれの尖ったやり方っていうのを見てきて本当に素晴らしいと、本当に実装されたなということで、教育委員会の皆様と、現場の先生の皆様には本当に地元の人間として感謝を申し上げるところです。

一方で、経済側の札幌の現状を話しますと、先週ちょうど10の職種別、例えば建設業とか情報とか物流とかあるんですけど、10に分けた会議を連続でそれぞれやっていて、コロナ前はそれぞれのテーマがバラバラだったんですけど、コロナを過ぎて、ほぼ全ての職・業種の会議で人手不足の問題とAIが、議論の6割ぐらいを占める共通課題になったなというところがあります。

もう一つ、日本商工会議所、全国に商工会議所が515箇所あるんですが、この会議が月例で行われていて、特に今年感じているのは、都市間の勝ち負けがはっきりしすぎたというか、大阪ですとか福岡はもう鼻息荒く景気はいいです。かたや北海道とか四国とか、中国とかは、人手不足からくる負担感で、暗い顔をしているというところがあります。

こういう中で、では札幌の高校教育をどうするのかっていう面をやっぱり意識すべきで。中等

教育のあとには高等教育があるので、やっぱり市立高校はその基礎的な学力を上げていく必要があるんじゃないかというところと、冒頭言ったその地域の幸せを求めるのであれば、地元愛、自分の高校愛を育むようなカリキュラム活動を少し入れていったほうが、今後5年、10年いいんじゃないかと。非常にこう地元経済界のエゴですけど、市立高校を出た生徒はぜひ地元で働いていただきたいというところがあります。あと、人口減少ターンに入ってずっと言われていますが、北海道・札幌は沈み始めてるっていうのを感じていて、一人一人が豊かな暮らしを守っていくためには、やっぱり学力を上げていくしかない。学力と経済、自分の家計ってすごく隣接するので、市立高校の皆さんには、今まではチャレンジングにアクティブラーニングとか、GIGAスクール構想の申し子たちが今、来てると思うんですけど、これからは、変にこうAIに詳しいとかじゃなくて、基礎的な学力を上げて、AIなんて誰でも使える世界が来てますので、そういうテクニックじゃなくて、基礎能力を上げるっていう風に揺り戻しをしたほうがいいのかと感じています。

【山中委員長】

ありがとうございます。土田委員お願いします。

【土田委員】

ありがとうございます。私どもは、スタートアップっていう立場と、あと母ですね。大学生と小学生の親で、これが多分息子の教育っていうところにも影響してくるのかなって思います。そういう観点では、例えば息子に何を求めるかっていうところと、我々の会社として何を求めるかっていうところは、やはりテクノロジーっていうところへの探究心であるとか、そこへの活用ができる人材であるっていうことが一つと、やっぱり、日本人ってなんでこんなに英語できないかなと。この前も、海外にいたんですけど、あなたは何人かと。英語ができるので日本人のわけがないと言われるんですね。これをなんとか変えていかなきゃいけないんですよ。北海道を強くするために、翻訳は生成AIでできるかもしれないけれど、やはりコミュニケーションが英語で取れないと世界と戦えないんですね。ですので、グローバルな観点での改革が必要だと思ってます。もう変えていかなきゃいけない。もしかしたら授業を英語でやらなきゃいけないぐらい抜本的に変えると、世界で北海道が戦えるっていう風になってくると思います。そういう部分を先生たちやってよって言われても、どうやってやるんですかっていうところがあると思うので、もっと有識者が学校の中に入って行って、そんな中でこう育みたいなことができたなら、次の時代安心かなと。やはり明るい未来を見せたいっていうところがありますので、そういうところに携わらせてもらえたらと思います。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。林川さんお願いします。

【林川委員】

お願いします。私はPTAの役員を10年以上務めていますので、保護者の立場として、色々考えを述べさせていただこうかなと思うんですけども、私は今一番下の子が中学2年生で、これから進路を選択していく、まさに真っ只中の中で、色々なお話を聞かせていただいて、こういった取り組みをされているという具体的なことっていうのはこの資料を読み込んで初めて知ることでも多々ございまして。

一般的に、家庭で親が得る情報っていうのは、本当にこちらから学びに行かないと情報が届かない。色んなところを見ればわかるのでしょうけれど、そんなところを見る時間がある保護者さんはそんなに多くないんじゃないかなと。やっぱり子どもの健全育成というか、教育っていうのは学校に任せるだけではなく、家庭教育が担う部分っていうのはすごく大事ななと思っておりますが、なかなか私自身もそうなんですけれども、ずっと忙しく働いている中で、じゃあ子どもに向き合って、家で子どもをちゃんと教育している時間ってどのくらいあるのかなと。親として選択肢をこう色々あるよと教えることも難しいっていう部分もある中で、こういった素晴らしい取り組みがあるのに、それが家庭に届いていない。選択する時の選択肢につながっていかない現

実って実はあるんじゃないかなと思っています。今PTAやっていて思うのは、PTAはやっぱり学校と家庭をつなぐもっとも身近な存在だと思っていますので、こういったことをもっと一般の保護者に伝えられるようなつながりがもっとできれば。PTAって今なかなか活動しづらくなっていて、学校と保護者の距離ができてきているというのはあるなと思っていますところなので、学校と家庭が密になって子どもを育てていく。そういった人間が育つことで、将来の選択が自分たちでもできるという人が育つんじゃないかなと思います。今回こういった機会で色々と勉強させていただいているので、これを私からももっと発信できるように学びを深めていきたいと思っています。

【山中委員長】

ありがとうございます。では名達さんお願いします。

【名達委員】

名達です。私は中学校不登校で大通高校に進学して、卒業したっていう身なんですけど、私は大通高校に進学する時は単純にもう、ランクがなかった、内申点がなかったの、そこで通信の学校とかを探している中で大通高校を見つけて、商業的なことを学びたいなと思って進学したんですけど、ここまでの話だったり経験っていうのを踏まえて、やっぱり知ってる知ってないの差がすごく大きいなと、私は感じていて。この各学校の特色を知っていて進学していく生徒さんっていうのは、私も普段から結構高校生だったり中学生と関わる機会が多いんですけど、特色を知っていて進学していく生徒さんは結構伸びていくというか、自分なりの役割を見つけていくっていう印象があって。そうではなくて、これまでのこの改革っていうものを知らずに、市立高校だからっていう感じで進学していった生徒が、なんか思ってたのと違うとか、他の子たちはすごく輝いているのに自分は何してるんだろうみたいな感じで自信を失っていくような場面も何度か今年去年と見てきています。

私がいた時よりはセミナーとかもあって外部のプログラムを知る機会っていうのはすごく増えているなと感じているんですけど、こうした未来に強い人材の育成を進めていく一方で、そこに外れてしまったグラデーションがある生徒っていうのが、どんどんこう狭くなって行っていってしまう気がして。学校の中で出会いの機会がなかったり、そこに立ち会えない生徒に対して、外部の大人だったり、私も卒業生として何かできることがあれば、大人をつなげたりするプログラムに後押しするみたいなことがもっとできたらいいのかなっていう風に聞いていて思いました。生徒会もやってたので、リーダー交流会とかで各校の先生方だったりだとか、色んな方とつながる機会があったので、自分の幅を広げる機会っていうのを作ることができたんですけど、そういう出会いがなかったら成長するってことができなかったかなと思うので。私はそういう立場で、羽ばたいていっている生徒さんっていうよりかは、なんかちょっと機会を見失っている生徒さんに、こうアプローチできたらいいなと思って聞いていました。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。谷さんお願いします。

【谷委員】

私は6年間、札幌開成中等教育学校で学びを深めていきましたが、振り返った時にやっぱり社会との接続だったりとか大人とのいろんな出会いがあった6年間だったなと思っています。これまでの取り組みの中にもあったんですけど、食農体験プログラム「アニマドレー」というものに私も参加させていただいたり、あと学校の中でも職業体験、ボランティア活動とか結構本当に社会との接続の機会がたくさん開かれていたのと、探究学習も、一人一人の小さな興味関心とか「これ好きだな」というところを先生方が一個一個、こうちっちゃい芽を積んで、めくってくれたなという風には思っています。

そういう先生方だったり社会の大人との出会いだったり、そういう大人との接続が多ければ多いほど、こういう大人像があるんだ、こういう社会があるんだ、なんか未来ってちょっと楽しそうだなという風に思う機会がすごかったなと思っています。という風にちょっと振り返っていま

す。やっぱりこう、機会がたくさん開かれていること、いろんな扉が生徒の周りにあることがすごく大事ななという風に思っていて、それが1個2個じゃなくてたくさんあるっていうことが結構大事なのかなと思ってます。

まだまだ生徒自身、私自身もどこに自分の好きとか興味とか得意があるのかわからなかった中で、いろんな機会、いろんな大人がいると、そこの自分の芽とか成長の機会に気づけるっていう風に思うので。そういう機会がたくさんあるっていうのは、今の時代すごい大事ななという風に思いますし、あともう一つですね、大人たち、先生方とかが楽しそうっていうのはすごく大切です。生徒主体、生徒主体って言われればなしの生徒より、なんか大人たちが楽しそうで生徒もそこについていきたくなくなったみたいな、なんかそういう教育の現場があるとすごい良いなという風に思ったりしていました。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。林さんお願いします。

【林委員】

ありがとうございます。もうこの2人が正解なのではないでしょうかという感じがします。もう本当にこの数年改革プランがこういう風に2人に息づいてきているんだなと感じていたんです。やっぱりこれを、土田委員もおっしゃったように見せていかなきゃ、なんか発信していかなきゃいけないなというのは強く思って。例えばこの2人を高校改革アンバサダーに任命します、そして番組化します、みたいな。あとこの会議もクローズドでやるのではなくて、ワーキンググループも多分活発に動いていくでしょうし、例えば、放送局にずっと付き添ってもらって、番組化するってこともあるでしょうし。そういう見せ方も、ブランディングが得意な方もいらっしゃるの、この数年間を、このプロセス自体を開いて、どんどん、どんどんまた高校面白くなってきますよみたいなのを発信していく手法っていうのもありなのかなという風に思いました。

私の立場で言いますと、やっぱりまちづくりと教育を本当の本気で一体化させるっていうことができれば本当にすごいなと思って。その一つのチャレンジでやったのが百合が原公園のパークPFI事業ですね。先ほどもお母さんに届かないというお話もありましたけど、子どもたちが生き生きとして現場、教育現場から離れて地域で動いているっていうことを見せるカフェを作ったんです。百合が原公園の中に。出資者が、数社あったんですけど、数億円すぐに集まりました。これ何と声かけたかと言うと、みんなで学校作りましょうって、言ったんですよ。学校現場じゃない、みんなでその民間企業の青年経済人が集まって、学校作りましょうと。それでみんな出してくれるんですよ。それぐらい札幌市の中のこの探究とまちづくりの機運が上がっていて、これは他の街では絶対ありえないことですね。ただこれが単純な民間の人がカフェを作っただけに留まると本当に勿体ないです。この前も小学生が探究の授業でパンを販売してくれましたし、そこに「どんぐり」のパン屋さんが、メンターリングしてくれているとか。あとは豊明高等支援学校の生徒たちが、授業として使ってくれているとか。色々本当にこう学校とお店の狭間のところを行っている新しい施設という風に考えてやっています。

そういうものがどんどんこの街に増えてくると、予算面もそうですよね。そこにもう事業化されていてコーディネーターがいますんで、もう教育現場からコーディネーター出す必要ないですよ。ある意味言い方を変えると、そこでこう学校と地域をつなぐコーディネーターがもう事業の中に配置されているので、そこを教育界の方々がうまく活用していただければいいだけなのかなと思います。そういうことをしっかりこのプランの中にも公的に位置付けをして、例えばですよ、そういうことをやる民間事業者、お店を作る人は何かちょっとインセンティブを与えるとか。そういう仕組みができると、教育と街を掛け合わせたようなお店だったり施設がどんどんこれから増えていく。そして学校、生徒たちが働ける、活躍できる場所が本当に街の中に増えていく。そして公園とか広場とか道路、河川もこれお店作れるんです、今って。制度が緩和されていて。もう公園の中に建ったその建物で高校生がなんか販売してますみたいなことも全然できるわけで。そこでまた、教育移住したいとか、先ほど土田委員からもありましたけど、この街で住んでみたいってなると本当にまたそれが地元の価値を上げていくと思いますんで。

となるとやっぱり、なんですかね。そういう地域の外に出た学生は学力がまた向上してま
すみたい。そういうアーカイブの調査も必要でしょうし、そういう一連を、教育委員会さんだ
けでは難しいところも部署横断で。定住・移住・公園も、まちづくりもまた別部署だと思います
んで。そういったところともうまく連携しながら、この数年間みんなでこう動いていけるといい
のかなと思いました。長くなりましたが、以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。松田さんお願いします。

【松田委員】

よろしくお願いします。私も委員のお話いただいてから、この立場に準じて一つだけ、ワニイ
シューに絞ってアピールしようと思ってございまして。それは通信制高校をなんとか市立で作っ
て欲しいという願いです。第2、第3の名達さんを、卵を私はたくさん見てきているんですけど、
やっぱり市立高校入れないんですよ、なかなか。それでLだのSだのRだのアルファベットのつい
た通信制に商業ベースに絡め取られていったりだとか、北の外れの方に行ってますね。別にどこ
か批判しているわけではないんですけど、通えなくなっている若者をたくさん見てきて、なんと
おいしいことかと思っています。でも新しい通信制高校を設置してくれっていうのは途方もない話
だと思うんですけども、学校間連携による単位認定、ちょっと調べたら「メディア学習」を、盛
り込んでいるということで。例えばその市立通信制に所属をして市立高校のいろんな単位をこう
取れて、「ザ・市立高校通信生徒」みたいな形で単位を通信ベースで取っていけて、課外活動に
関してもいろんな一つの学校だけではなくて、色んな活動にコミットできるような。そんな市を
あげて一つの学校に所属しない、若者を育てていくみたいな、ちょっと途方もなく聞こえるかも
しれませんが。今通信制高校に対する偏見とかも無くなっていますんで、その通信制高
校生が増えてますので。通信で学ぶ、札幌で学ぶという、若者を育てるということを、ぜひやっ
ていただきたいというか、やりたいのでその設計に携われたらこんなに楽しいことはないな
と思っています。以上でございます。

【山中委員長】

ありがとうございます。次は小泉委員お願いします。

【小泉委員】

札幌旭丘高校の小泉と申します。本校のお話をさせていただきます。先ほど谷委員からのお話
でありました、教員が、先生方が楽しくなければいけないという、その言葉が非常に重く感じら
れました。生徒に何か仕掛けていっても、スタッフである教員が、先生方がやらされ感と使命
感、使命感と言えいいのかもしれませんが、義務感だけでやっていくというのは、なかなか続
かない。持続可能ではないという風に現場で実感しております。

先ほどの資料にありました旭丘高校、20年前に単位制になり、当時では先進的だった「総合的
な学習の時間」を軸にした教育課程の再編というものがあり、かなり先進的だったんです。た
だ、やっぱり時間が経ってくるとどうしても、ルーチン化してきて、あんまり新しいものではな
くなってきたなという実感です。私実は15年前に教員として勤務しておりましたので、なんと
なく肌で感じているところで、このままじゃいけないと思っている先生方が何人かいて、実は本校
冬休み一週間入ってるんですけど、この冬休み中に自主的にワーキンググループ作って、よくあ
る模造紙に付箋を貼っていくような、こういう風に変えていきたい、という動きがやはり起っ
てきたっていうのは、私は副校長として手前味噌な言い方になりますけど頼もしく思っており、
今後の改革に期待しているところであります。

それができたのが、数理データサイエンス科が今4年目で、卒業生がこの前初めて出まして、そ
れとほぼ期をいつにしてスーパーサイエンスハイスクールの指定を受け、かなり生徒の探究が深
まってきたことによると考えております。あまり自慢するのも良くないんですけど、この夏に指
定3年目で生徒が研究発表会で入賞しました。3年目で入賞ってあんまりないらしくて、それ自体

が生徒もかなり育ったんだなと。もちろんアンテナの高い生徒が集まっているというのもあるのかもしれませんが、中には高校時代起業して4つの会社を持っています、というような生徒もおります。そういう子が集まってくるのが、やっぱり機会、数理データサイエンス科がある、それとスーパーサイエンスハイスクールがあるという機会に恵まれているということがあると思いますので、ハード面もあって充実してくるということを実感しております。

【山中委員長】

ありがとうございます。牧野委員。

【牧野委員】

まず私個人としていつも思うのは、生徒たちにどのような資質能力、どのような力を3年間で身につけさせるかっていうことがやはり我々の命題なのかなと考えています。最終的には、いわゆる非認知能力という「目に見えない力」と言われてますけれども、これは社会に出ていくためには、一番大事な力なのかなと考えています。そのために例えば、国のほうでは、少し前までは社会に開かれた教育課程と言っていましたけれども、もう今はすっかり「地域とともにある学校」というふうに言い方が変わってると思います。各学校とも色々な探究活動を地域と連携して実施していますが、これは、生徒が自分たちで地域とともに何かを考えて、それによって、例えばコミュニケーション力だったり自ら考える力であったり、主体的に何かを考えるという、いわゆるその社会に出てから役立つような非認知能力というものを、自然に身につけていってるのかなと考えています。

したがって、これは各市立高校もそうですが、今後の方向性ですとか魅力ある学校にするには、まずそういうものを、第一に置かなければいけない。それから、本校の課題なんですけど、学校の中で誰が主語なのかがはっきりしないというか、生徒が本当に主語になっているのかというところが本校ではあります。若手はずいぶん考え方も変わってますから柔軟な発想で色々やるんですが、教員の考え方がアップデートされない傾向はあるかもしれません。古いままの体質が本校にあり、そこが課題として挙げられていますので、次年度以降、速やかに、今本校も検討委員会立ち上げてるんですが、生徒が主体的に、主役になれるような学校作り、それから地域とともに何かをできる学校というふうに、今急務で作業を進めてるところです。

それで先日町内会から依頼があって、まちづくりセンターなんですけれども、新川の桜並木、ご存知ですかね。ずいぶん長くて、確か日本で一番長いような有名な道路なんですけれども、その桜並木の桜が、実は塩害で、特に手稲側の方があまり大きくならないそうです。それで高校生の力も借りて、それをなんとか保存するようなことをしたいというご依頼ですとか、町内会から、高校生を交えてこういうことをお願いしたいというのが最近割と多く入ってきています。本校の生徒、生徒会中心になりますけれども、そういうことに非常に熱心に取り組みたいという意見もあるので、そういうのも含めて、今後本校としては、そういう地域とともに何かをやるということを重視したいと思いますし、市立高校全体でもさらにそれを加速させて、全体の政策として地域と何かを行い、生徒にこういう力をつけるということを明示するということは非常に重要なかなと思っています。

あともう一点、先ほどお話が出ていましたけれども、「誰一人取り残さない」という言葉ですが、国のほうでは多様性の包摂を次期学習指導要領のキーワードとしています。札幌市の教育としても誰一人取り残さない教育というのを、随分前から考えてくださっているので、そのあたりでも非常に大切にしなければいけないポイントと考えています。例えば、高校では各校ともオンライン授業を実施して、なかなか学校に来れない生徒の支援をしたり、あるいは教育相談体制を充実させたりしていますが、まだまだ不十分なところもありますので、今後の学校を考える上では、みんながうまくいっているわけでは絶対にありませんので、そういう誰一人取り残さないという視点も踏まえながら検討していくということも大事なかなと考えております。以上でございます。

【山中委員長】

ありがとうございます。加世田委員。

【加世田委員】

私が勤務しております平岸高校、46年経ちました。そして先ほどもご紹介いただいたデザインアートコースができて20年が経っているところです。おかげさまで多くの中学生に選んでいただいているんですけれども、この先の学校の存続を考えた時に、このままで本当にいいのだろうかということを、日々思い悩みながら進めているところです。今日色々なお立場の皆さんからのお話を聞いて、すごく勉強になっている部分もありますし、力を入れなきゃいけないところがあるなど、今思っているところです。

本校、平高って言うんですけども、平高の未来を考えるプロジェクトっていうのを立ち上げてまして、この先どうしていけばいいか、校内の分掌とか年齢とか全く関係なく、希望する者が集まって話し合おうというのやっております。この中での話し合いを、これから行われるワーキンググループにも反映できるようにしていきたいなと思っておりますし、皆さんのお話を聞いていて感じたところは、やはり学校だけでは留まらずに、地域との連携、また企業との連携が本当に大事なかなと。キラキラ輝く大人と高校生をつなぐということが本当に大事ななっていうのを、本校の取り組みでも感じているところです。

探究学習っていう部分で言いますと、地域との連携で「スミヒラベース・プロジェクト」という取組みを立ち上げてまして、ここにいらっしゃる林コーディネーターのお力添えによって、本校、豊平区にあるんですが南区とも接しております、澄川の地区の連合町内会、南平岸地区の連合町内会、両方との関わりがあります。その仲介をしていただきながら、昨年からはスタートしたプロジェクト、地域との連携を重視しております。

また隣に平岸高台小学校、本当に校地が繋がっていてお互いの校地内を生徒児童が通学するという、そういう特殊な関係ありながら、なかなか連携が取れてなかった部分、今年から連携を強めていこうというので、高校生が小学校の方に出向いて、こういった活動をしたんだとプレゼンし、その結果、様々な障壁を乗り越えて色んな取り組み、活動を行っている状況でございます。地域との連携の分、非常に叫ばれている部分もあるんですけれども、個人の探究になりますと、必ずしも地域連携によって、何かその個人が探究したい内容と繋がるかというとなかなか繋がらない部分もあります。それに関しましては、「平岸マイプロジェクト」というのを立ち上げてまして、個人の、希望するものについて探究するという取り組みも行っているところなんですけれども、これがまだスタートしたばかりでして、組織的に動けるような状況にこれから持っていく、もしくは教育課程の中にも取り組んでいくというのがこれからの課題となっております。

また市立全体で考えますと、市立高校の強みっていうのは、学校数が少ない。逆スケールメリットと言いますか、少ない分変革を起こす時にすぐ動きやすいという強みがありますし、横の繋がりも非常に大切になるなと思っております。今までも進んでいるんですけれども、これからもこれを進めていきたいなと思っておりますので、その分について色々またご助言などいただけると嬉しいです。ありがとうございます。

【山中委員長】

ありがとうございます。細田委員。

【細田委員】

よろしく申し上げます。今日持った感想は、先ほど新川の牧野先生からもありましたが、若い先生方は新しいことをどんどん吸収して進めていく力もありますし、ICTも強いですし、すごく頑張っているんですね。だからといって50代、60代が頑張っていないわけではなくて、自分もその年齢で、このスピードに、変化のスピードについていくのがとても大変で、なかなか情報を得てもどうしていいか、長年積み重ねてきたものを変えていくのがすごく大変でありまして。管理職としてはそのところを、そういう年代の先生方にいかに理解してもらって一緒に進んでいく

かってというのが課題だなと今日も思いましたし、日々感じているところです。そしてその市立高校の今後のあり方というのを一緒に考えていけたらなと思っています。藻岩高校は再編いたしまして、藻岩という名前はなくなりますけれども、藻岩高校は探究学習に力を入れておりますので、そこを軸に、衰えさせずにいかに良いまま再編校につなげられるかっていうところも、管理職としては頑張っていかなければいけないなと思っていますところ。私自身は国際推進委員、市立高校のそういった委員でもありまして、異文化交流的なイベントはあるんですが、異文化交流だけでとどまるのではなく、さらなる学びに繋げて社会に繋げていく、そういった力を育てるために、うまく立ち振る舞わなきゃいけないなと思っていますが、なにせ私も経験不足ですので、皆様のお力を借りながら、今後国際教育という、英語の力をつけさせていくということも、この委員に入れていただきましたのでチャンスだと思って、ぜひ皆様のお力をお借りしたいなと思っています次第です。ありがとうございます。

【山中委員長】

ありがとうございます。勝田委員。

【勝田委員】

札幌啓北商業高校教頭の勝田です。本校は専門高校ということで、商業に関する未来商学科というものを設置しております。札幌市の高校ですので当然、自立した札幌人というものを育成に取り組んでいくんですが、時代とか場所とか、そこで生み出される空間っていうので、自立した札幌人に自立するというのがどういう意味があるのかっていうのは、これは変化すると思うんですよね。それをやっぱり、どこの学校に赴任しましても、その学校ごとで捉え直していく必要があるんじゃないかなという風に思っています。商業高校っていうと、一昔前はそろばん、電卓、タイプライター、ワープロなんていうものがあったと思うんですが、そういったものはもうすべて今の技術で不要になりました。電卓をどんなに早く叩いても、ちゃんとExcelにデータが残っているかとか、そういうことが大事な世の中になりました。ですから、なかなか専門高校の教育、工業も農業もそうですけど、資格でなかなか参戦しようっていう学校はないんですよね。かつては商業科っていうのがあったと思うんですけども、もうどんどん撤退していった、本校にしかないんじゃないかっていうところなんです。ですから、その中でもやっぱり価値を見出さなきゃいけない。先ほど資料の中にも「ゼロからイチを作る」というのもあると思うんですが、新たな付加価値をどういう風に作っていくかということで、今は簿記を当然やらせて検定取らせるだけでは意味をなしませんので、やはり取引先のデータを見た時にどういうところにウィークポイントがあるのかとか、これはどういう風な経緯で負債が増えているんでしょうか、資本金が、利益が増えてないようですがどうなってるんでしょうかという鋭い質問をですね、生徒から出るようになればありがたいなという風に思っているところです。商業高校としてできることをまた見つけながら今後の教育に取り組んでいきます。ありがとうございます。

【山中委員長】

ありがとうございます。幸丸委員。

【幸丸委員】

大通高校校長の幸丸でございます。市立高校が横並びになってくると、本校はどうしても特殊な学校と思われると思うんですけど、ちょっとここではお伝えしたいことがあります。

私が3年前、藻岩高校に務めていて教頭だったんですけど、そこでは今紹介されている総合的な探究の時間、こういったものをしっかりやって、生徒が自走してというような形の中で勤務してきて、そこから大通高校に移った時に、生徒は様々です。それで、例えば藻岩高校でやっているようなことに耐えうる生徒もいれば、真逆な、まったくその学校に来ること自体が難しい子もいます。そんな中で、やはり皆さんが大通高校をどういう学校だっている風に捉えられているかっていうところが私は一番気になるところです。確かにこの市立高校改革の中で大通高校が、複数の夜間定時制高校を統合されて、例えば中学校まで不登校を経験した子どもたちでも通える学校と

いうか、再起を図れる学校ということで存在していることはご理解いただいていると思うんですけども、そういった肩書きというか、表面に出されているもので守られている学校ではダメだなというのを、実情を持って感じています。

開校してから17年ですけども、おそらく開校当初は準備室から立ち上がって、そして開校から3年、ここはもう本当に営業しながらというか、走りながら作り上げるということをやって、なんとか安定して5年・6年といった時に、10年目まではその惰性でいけると思うんですけど、10年経つと安定してきたところからどんどん下り坂になっていくなというのを私は感じているところです。

開校当初に今までやってきたことが行われるんですけど、なんの意味でやってるのかとか、この子たち一人一人のアセスメントをちゃんとするとか、そういったことがだんだん抜けてくるといふか、丁寧さが欠けてくるといふか、そういったことを日々、勤めながら感じています。

そして卒業生が来てくれているので、そんな中で話をするとき非常に話しづらいんですけど、こうやってここに来てくれるような卒業生を生み出す一方ですね、先ほど松田委員からもあったように通信制の学校を作ってくださいと。市立高校はもう高嶺の花で入れませんというようなことを言われていながら、本校に入ってきた生徒たち、実は表には出てないと思うんですけど、年間で60名が通信に転学します。そして20名が6年で卒業できずに退学します。320名が年間の定員ですけど、その中から3分の1に当たる80名がうちの学校からいなくなるということは、これはやはり役割を果たしてないなという風に思っていますので、そうなる原因がどこにあるのかというようにそこをちゃんと探っていかなければ対応もできないですし、その看板に守られているような、中身が伴わないような学校ではダメだなと。

だから今回この高校改革の検討委員として参加させていただく段階でも、やはり本校はもうこのまま存続していかなくちゃいけないという重要な役割を担っていますし、場所的にも札幌の中心にあって、先ほどから学校間連携や、いろんなことで市立高校が接続しながらやっていけるということになってくると、その中心的な役割を担っていかなきゃいけない重要な立ち位置にあるんじゃないかなと思ってますので、そういったところが私はこれからこの新しい方針の中で打ち出していけたらなという風に思っています。

あと、実情にあった形というか、ここで言うことではないかもしれないんですけど、先ほど資料の中で夜間部の倍率はかつて1.5倍だったと思うんですけど、でもこれ実は過去から、あまり夜間部というのは今もう希望者がいなくて。一番夜間部に本当に入りたいと思っている生徒たちがどれぐらいいるのかを計るためには、自己推薦の出願をした時の一般の出願者を足した人数でしか計れないんですけど、多分この倍率って再出願のもの、一般入試のものも含めた倍率で出ているので、毎年そんなにたくさんいないですよ。午前部、午後部に入れなかった子たちが第2、第3希望で仕方なく夜間部に入っているというところもあるので、ちょっとそのところはもうだんだん夜間定時っていうのは時代のニーズに合ってこなくなったかなっていうところから、なんとかこの午前と午後の枠のところを充実させるような形で改革していけたらなという風に個人的には思っているところです。これからも本校の生徒に対してもそうですけれども、昨日の自分より強くなるというか、昨日の自分を超えていくというのをそれぞれの段階の子どもたちにサポートしていきたいなという風に思ってますので、この会で何か本校も改善されるきっかけとなればと思ってます。どうぞよろしくお願いいたします。

【山中委員長】

ありがとうございます。畠山委員。

【畠山委員】

開成中等の畠山です。よろしくお願いいたします。3つお話しさせていただきます。

1つ目ですが、すでに西野先生から説明ありましたが、本校はIB、国際バカロレアのカリキュラムも使いまして、課題探究的な学習を展開しております。その成果、谷委員さんがまさに代表的な生徒のモデルとなっていて、こうした立派な生徒がたくさん出てきています。

2つ目です。課題といたしましては、本校でやっている実践をより発信していきたい。先ほどお

話出てましたけれども、保護者、地域、もちろん市立高校の仲間たちにも発信していきたいなという風に思ってます。そうすることでより連携が深まって、もっとより良い教育の実践の成果が出るんじゃないかなという風に考えております。

最後3つ目です。こうした会議に参加させていただきまして、様々な方の多角的なものの見方が非常に勉強になってます。私自身それを意識して日常の教育活動に携わっていききたいなというふうに思っております。よろしくお願いいたします。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。加瀬委員。

【加瀬委員】

円山小学校の加瀬です。私は小学校という立場でこの会にお招きいただき、今日お話を聞きながら改めて色々考えさせられました。私は小学校なので、小学校からはどんな景色が見えているかというと、前には中学校があって、それから後ろを振り向くと幼稚園だったり保育園だったり子ども園だったりという、その繋がり、接続の中で子どもたちと一緒に過ごしているのが小学校です。一方で中学校はその小中接続とか、中学校とのいろんなやり取り、子どもの情報、情報のやり取り、それから卒業に当たっての教員同士のやり取り。あるいはその研究面で、授業をお互い見合ったりということも従来ずっと進められてきました。幼保小とも同じです。いろんな幅広いところから小学校に入学する時にいろんな情報をもらったり、それから相談事をお互いに共有したりというようなことをしておりました。そうすると小学校と高校って一体どういう繋がり、どういう関係があるのかなって思ったりもします。

先ほど平岸高校のお話も聞いて、なるほどな、いいなと思ったりもしました。高校は、例えば6年生の学級の掲示板の近くに「〇〇高校」みたいなポスターが貼ってあったりして。直接その高校っていうことではないんだけど、最近はその高校が直接小学校へっていうような流れも一方であるっていう風な感じをしております。何も私立の高校だとか、中高一貫校というだけではなくて、なんかそういう流れも出てきているのかなって感じはしております。

今日資料にも札幌市立の各校のこのスクールミッションみたいな、こういうものに基づいたこういう魅力あふれる情報。大人にとってはすごく魅力あふれるんだけど、私は小学校の児童って考えると、特に6年生、卒業間近に控えた6年生の児童にも、そういう高校の魅力っていうか、そういうのがこう伝わるようなものがあるとすごくいいかなっていう風に思います。すごく単純に言うと、中学校はある意味学区で入学するので、ほぼ選ばずにそのままそこへ行く。けれども、高校っていうのはその選んで行くっていうことがバーンと出てくると、その小学校からこんな高校素敵だな、魅力だなんてなると、その高校への憧れっていうものを持って、それは児童のその何というでしょう、目標だったりモチベーションにも繋がっていくのかなっていう風に思います。

それでこれは子どもの話で、もう一つ教職員っていう立場でも私ちょっと思っていて、今探究学習っていうことも高校の素晴らしいところすごく大切にされていて、そうしたその学習の繋がりでも、言ってみれば、例えば小学校で何を学習しているかというと、1、2年生で生活科っていうもの学習して、それから学年上がると総合の学習が入ってきて。きっと小も中も高も多分一貫しているものはきっとあるはずだから、そういう学習面のところの何というでしょう、やり取りというか確認というか。そういうものを我々がしていくっていうことも大切なのではないかなという風に思いました。

もう一つすみません、とっても個人的なことなのですが、私個人的には、北海道算数数学教育会という研究団体に所属をしております、この大会、今年も札幌であったんですけど、特徴は小学校、中学校、高校の三校種で同時に行う会なんです。私はちょっと残念ながら機会がなかったんですけど、私の仲間の校長先生が。小学校ですよ、高校の授業、数学の授業を見せてもらったと。いたく感激しております。偏見持ってたけど高校の数学の授業ってこんなに面白いんだなと。子どもがどんどんこう自分で課題を掴んで、「もっとこんな方法があるんじゃないか」ってこうやり取りをしている様子を見て、いたく感激しておりました。何かそういう教員同士で

も、なんかそういう、「将来、今の児童・子どもたちがあと3年4年経ったら、こういう風な姿を目指していけばいいのだな」とか。反面、高校の先生も、こういう生徒っていうのは、こういう何というでしょう、歩みをしてきたからこういう生活、こういう姿にもなっているのではないかっていう、お互いその何というでしょう、知るということも大切なのではないかなと。そして気がついたんですけど、札幌市立なので、よく考えたら庁内メールは届くし、イントラネットも繋がってる。交流って言ったら大変だけれども、でも共有だったら簡単にできるものではないかなとちょっと思ったり。そんなことを考えながら今日参加させていただきました。どうもありがとうございました。

【山中委員長】

ありがとうございます。伊藤委員。

【伊藤委員】

八軒中学校の校長、伊藤と申します。よろしくお願いいたします。今日はこのような会に参加させていただきましてありがとうございました。自分も3年生担任をしていて、卒業生を出しまして、市立高校にはたくさんの生徒がお世話になりました。本当にありがとうございました。

その中で、子どもたち、尖った子たちは、例えば「英語やりたかったらグローバルコース」ですとか、「美術やりたかったらデザインアートコース」なんていう風にこう選んでいくんですね。さらに進路指導していく中で、ある程度こう選択の幅を持ってる生徒はどんなところを見てるかということ、やはり高校生活が魅力的かどうか、っていうところをかなり生徒たちは見てました。じゃあどういう形で子どもたちはその高校のこと知るかということ、学校公開ですとか学祭に参加させていただいて、その雰囲気を感じることができます。その中で「どこの高校がどれくらい魅力的だ」とか、「あと自分はこの高校で部活はこんなこと頑張りたいです」とか、「行事頑張りたいです」とか、そういったことを見通しながら進路選択をしていきました。そう考えると、かなり中学生は高校生活に対して、夢と希望を持ってやっておりますので、ぜひ市立高校のこの魅力的な教育課程ですとかコース、そういったものをどんどん発信していただければなという風に思っております。

あと入った後なんですけれども、やはり進学に向けたサポートですとかそういったこともおそらく期待されているかと思しますので、そういったこともぜひ小中高大という風に繋がっていく部分だと思いますので、お願いしたいなという風に思いながら、この会に参加させていただきました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。杉山副委員長。

【杉山副委員長】

もう、いろんな立場からのご意見を伺いながら、もう一周議論ができたらいいのにっていうのが、今の率直な感想です。

今ご意見を伺っていて、いくつかの論点の座標軸のようなものが、少しずつ共有され始めているのかなと考えております。

第一に、やっぱりここが大事なんだなって思ったのは、札幌市に市立高校があることの意味を、この大事な節目でもう一度確かめることの重要性です。場合によってはアップデートが必要なのところもあるかもしれませんが、まずはそれぞれの立場から感じられているその意味を持ち寄って共有していくことはすごく大事なのかなと感じました。その際に、生徒や保護者、家庭にとっての市立高校の意味というのは、卒業生の二人に語っていただいたようにすごく大きなものがあるんだと感じました。同時に、札幌という街において市立高校が存在することの公共的な意味をどう考えていくのかという点も、一つの補助線として意識しておく必要があるという気づきを得ました。

それにしてもやっぱり卒業生のお二人の言葉は、響くものがありました。どういった力を身に

つけて社会に出て行ってほしいかというような、送り出し側の視点というのはもちろん大事ですが、社会に出た後で市立高校で学んだことの意味をどのように振り返るのか、卒業生の皆さんの言葉にぜひもっと触れたいという風に改めて感じました。「支えられた」とか「つながられた」とか、その経験があるかどうかは、やっぱり大学で学生一人一人見ているとすごくその経験がその後の歩みに大きく繋がっていくということを、大学で学生一人ひとりを見ていると実感しています。「生き方」とか「社会像」、「大人像」という言葉も使われてましたが、高校時代にそういったことに触れて、学べるつながりや支えがあるかどうかで改めて大事なんだなって感じました。市立高校があることの意味を、もう一度こう確かめ合えるような議論になっていけばいいなと思っています。

もう一点が、各校のお話を伺っていて、こうした改革を持続的に展開していく上で、先生方をどのように応援していけるのかという点は、やはり外せない議論だと感じました。検討事項の中の「教員の資質能力の向上」に関わる部分かもしれません。各校で、これからの学校のあり方を考えようという自律的なアクションが先生方主体で立ち上がっているというのは素晴らしいことだと思います。ただ、学習指導要領の改訂などによって新しい学習内容なども入ってくる中で、やはり先生方の力量形成を個人の努力だけに委ねるのではなくて、制度としてどう支えていくのかという点は一つ、この改革全体の生命線になる気もします。先生方をどう応援するかという議論は、ぜひ大事にしたいと思いました。

さらに、「地域」という言葉も非常に多く出てきました。市立高校ならではの展開として、地域と連携・協働しながら、この札幌をフィールドに学びが展開されていく点は、これからますます充実が図られていくところだと思います。そこで重要なのが、社会教育的な言い方になりますけれども、生徒の学びを支える大人同士がどう学び合っていくかという点だと思うんです。林委員をはじめとするコーディネーターの配置などによって、既に様々な化学反応が生まれていると思いますが、今まで出会ってこなかった札幌の大人たちが生徒の存在によって繋がれていく中で、互いに何を共有し、何を目指して活動していくのか。そのような大人同士が学び合う場としても、市立高校の存在が大事なんじゃないかなと思うんですよね。まず生徒の学びがもちろん最初にあるんですけれども、それを支える札幌の大人たちがもっと繋がれるんじゃないか。その可能性をもっと知りたいと思いました。

最後に、第1次改革の成果や到達点をどのように検証して、今回の計画につなげていくのかという点も大事な気がします。各校のこの間の改革の成果や到達点の上に、その次に何を強化していくか、新しい施策をどう立てていくかが見えてくると思います。事務局にまとめていただいた資料から、これまでの取り組みがよくわかりました。そして、その結果、今どうなっているのか、そこをもう少し共有した上で、これからの計画というか方針を検討していけたらなという風に思いました。

長くお話ししてしまったんですけども、市立高校があることの意味をもう一度確かめ合うこと。先生方をどう応援していくのか、そして私たち大人同士がどう学び合えるか。合わせて、これまで改革を重ねてきた市立高校の成果や可能性にもっと光を当てていくべきではないかというメッセージをお伝えして、私の発言を終わります。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。ちょっと時間は押しているんですが、もう10分くらい、この会も終わりにすることにして、私も少し喋らせてください。まず、札幌市の取り組みは非常にうまくやっけてるし見習うものがあると思っています。例えば、大通高校でも遊語部や日本語がうまく話せない子も入れるような仕組みが作られています。

一方尖った開成中等があって、教育委員会がレポートの書き方とかワークのやり方とかなどをまとめてPDFで公開してくださっているの、これらをいろんな高校で私は宣伝しています。もちろん市立高校プレゼンテーション大会などを通じた高校間の連携も素晴らしいです。林さんの学びまくり舎や谷さんが紹介してくれたアニマドーレ、そういうものがあるというのはやはり宝なんだろうな、これからも進めていって欲しいと思います。

それと探究の時間や探究の話が出ていたんですが、これらは総合的な探究の時間で、今だんだんと進んでいるのは、各基礎教科の中でどういう風に探究を入れていくかっていうことも重要に

なってます。私、宣伝をしないとイケないと思っていて、いつもこうやって新しい公共と、家庭科の二つの教科書を常に持ち歩いて、「昔とこんな違うんですよ」というのを説明しています。今までの家庭科のイメージじゃなくて、今や家庭科こそがウェルビーイングを作るための、人生をどう学ぶか、例えば金融教育なんかも全部入っている、もうそういうものになってきています。公共も同じです。こういう風に学校教育は変わってきているので、どうしても皆さんは、自分の高校とか自分が保護者の時の子どもの教育ってというようなイメージで、(高校を考える)評論家になっているんですけど、やはり一回この委員を含めて多くの人で共有するような、今の学びを作るための、先ほども言いましたけど勉強会とか現地訪問とかを入れていただきたいなと考えています。

それから、藻岩がMSPを始めた年に、私が教員研修をやって、教員の方々が(自分たちのやっていることが良いことかどうか)迷っていたところで、「先生方が楽しむことが一番重要です」ということを言いました。この検討会の話にも共通することだと思いますが、主体的な深い学び、つまりOECDのEducation 2030あるいはラーニングコンパスでは「エージェンシー」と呼ばれているものです。エージェンシーは主体的な学びで社会を変える力、信念だとされています。これを支えるのが先生のエージェンシーで、「コ・エージェンシー」、最近は「ティーチング・エージェンシー」ということです。先生が率先して社会を学ばなきゃいけないということになります。それはまさにさっきの「先生が楽しむこと」ということです。これを実現させるためには、先生もやはり教員研修を増やす必要があります。但し、さらに仕事が増えるとまずいので、そのことも配慮して、先生が学び直す時間をうまく作っていただきたいと思いますと考えています。

それからやっぱり重要なのは、「札幌をどうするか」というようなことで、「30年後は誰が担っている」というと高校生なんだという視点で(議論する時間)、「国が定めた道が定めた」からうちはこうだという視点も重要ですが、その一方で「そもそも教育って何だろう」ということを一回、ワーキングのメンバーやあるいは検討会のメンバーで、共有できる時間もあると、本当の意味の教育を考える場になると思います。つまり社会課題というのは大人が作り出した課題で、その影響を受ける、気候変動ではクライメートジャスティス(気候正義)と呼んでいますけど、被害者が次世代なので、次世代の人に課題を解決させようなんて甘い考えなので。その課題解決は、対処療法としては大人・現世代がやらなきゃいけないし、その間に学ぶということを通じて根治療法となる「社会を変えるための力」を次世代が身につけることを学ばないとならない。そういう方向に、社会は向かっているかと思います。

そしてこういう学びを、この検討会だけで取っておくと勿体ないので、先ほど林さん言われましたけど発信で、多くの人を巻き込むということもあり得るのかなと思います。また、道教育委員会の普通科改革やT-baseという遠隔授業との関係もなんか作れるといいと思います。そのようなことも利用しながら、より広い視野で考えていく。私がまちづくり戦略会議の委員の時も話していることですが、もちろん「札幌が輝く街になるのは重要」だけど、実は食べ物やエネルギーやいろんなものは、道、あるいは世界から得ているパラサイトな街や生活です。そういうことを考える生徒にもなってほしい、次世代になってほしいという気持ちがあります。

それで、国際化については、今、(藻岩の先生も参加して下さっているんですが)この二年間北大の留学生が出身国(いわゆるグローバルサウスの国)の課題を高校生が考えるというような国際会議をやっています。北大に来ている留学生は、単なる大学院生の留学生というよりも、JICAなどを通じて来ている人は、国の中心を担っている30代、40代の人々がまさに博士号を取ろうとして入ってきています。国を代表した、つまり発展途上国(グローバルサウス)のことをよく知っている人がいて、その人たちと交流させる。彼らにアルバイト代を出したりする予算はかかりますが、そういう活動を通じて、札幌にグローバルな感覚を持った、欧米系だけではない国際社会を考える人材を作るといったようなことも、すぐそこにはリソースがありますので、できるかと思います。

そしてAIですけれども、テストで評価されて機械学習できるのがAIの得意だとするならば、その対偶をとってみましょう。対偶をとるとAIが不得意なのはテストで評価できないものであるということなので、そういう意味で、探究的な学び方もする必要があって重要かと思います。

そして最後。私、この間あった「ジェンダーコレクティブ北海道」の実行委員もやっていますが、「NEW RAIL」の表彰式には、もちろん高校も参加してくださりました。ジェンダー平等は考えた方がいい。例えばここに座っているやっぱり男女比は、皆さんが悪いとか、教育が悪いって

ことをいうつもりはないんですが、それこそ「大数の法則」、統計学で言ってこれだけの人数がいたらこの比はランダムサンプリングではない、ということは明らかです。それを30年後もこの風景にしますか、というのを今高校に重ねてみると、ぜひとも何かの仕組み、それは単に採用を女性にしるとかそういうことではなく、男性であってもジェンダー・エクイティ（公平性）がどうということなのか、DEI（多様性・公平性・包括性）がどうということなのかということを学べるような仕組みを作ってくれれば、札幌がより新しい住みやすい街になるんじゃないかなという気持ちがあります。是非とも、ジェンダー・エクイティの視点を入れた議論もしていきたいと考えております。

【山中委員長】

こんな感じで私も演説してしまいましたので以上とさせていただきます。皆さんありがとうございました。今日は意見交換というところで、時間をしっかり使いたいということだったので、これだけ時間を使えました。皆さんのすごく色々な良い意見があって、私にも非常に勉強になりました。

それでは、本日のみなさんにいただいた意見を参考に検討ワーキンググループ会議の方で方針の叩き台の検討を進めていく、ということで進めていきます。これで本日の議事は終了いたしますが、ほかに何かありませんでしょうか。特にないようであれば最後に事務局から次回会議予定などの説明をお願いいたします。

【事務局：村山学びのプロジェクト担当係長】

次回の会議ですが今のところ3月、4月頃を予定しておりますが、本日の会議におきましてB案の方で進めさせていただくということで意見をいただきましたので、今後のスケジュールについてワーキングの方のスケジュールも含めて、一度事務局の方で精査させていただきまして、また改めて皆さんの方にご案内させていただければと思います。その際に現場の方も見たいというお話もありましたので、その辺も検討させていただきたいと思います。以上でございます。

【山中委員長】

ありがとうございました。以上で本日の議事を終わらせていただきます。15分ほどオーバーいたしました。長時間ありがとうございました。

<終了>